

環文ミニセミナー（第18回）

事務局

3月18日(金)開催の、第18回環文ミニセミナーの概要、質疑応答をご紹介します。

**第18回 ドイツで学ぶ環境とリスクの
社会心理学**

**講師：杉浦淳吉氏（慶応義塾大学 文学部
人文社会学科 社会学専攻 教授）**

コロナ禍の中、2020年11月から2021年9月までドイツに研究のため滞在していた。私のドイツとの関わりは、環境（環境先進国としてのドイツ）、市民参加（ドイツにおける環境問題での合意形成のプロセス）、ゲーム（ボードゲームやカードゲームが盛んなドイツの面白い発想のゲーム）という3つの面があるが、「どうすれば人と人とのコミュニケーションがうまくいくか」「うまく意見をまとめるにはどうすればよいか」などを研究するにあたり、これら3つの視点が私の中で統合されている。

今回のドイツ滞在は、当初は2020年4月からの予定だったが、EU域外からの入国禁止措置により11月に延期、ドイツに到着した日がロックダウンの初日だった。11ヶ月の滞在中、思うように研究活動ができなかった反面、ドイツの新型コロナ対策を自分が経験でき貴重な体験となったので、コロナ禍でのドイツ生活について報告したい。

ハンブルクでの住民登録の際には、役所内に入れる人数に制限が設けられており、レストランも閉鎖され、テイクアウトのみとなっていた。様々な場所に、密を避け距離をとろう、マスクしよう、手を洗おうと呼びかけるイラストが掲示されていた。マスクやトイレトペーパーの品不足が発生した時期もあった。スーパーは面積に応じて入れる人数が決まっており、買い物かごやカートで人数

をコントロールしていた（カートがなくなると入れない）。郵便局も中に入れる人数が決まっていた。昨年1月には、公共交通機関などでは高性能マスクの着用が求められるようになった。Click & Meet（ネットで注文して店舗に取りに行く）というシステムも、次第に出来上がってきた。滞後半になるとコロナの簡易検査キットが販売されていた。

ドイツではコロナ前にはほとんどマスク着用の習慣がなかったが、マスクの有効性が示されたことからスーパーや公共交通機関ではマスク着用を義務付けるルールもつくられた。ルールで決まった場所でマスクをしないと罰則があるが、ルール外の屋外やアクリル板があるところ（＝飛沫が飛ばないところ）ではマスクを外すことができるなど、科学的知見とルールに基づき自分で判断して行動できる体制になっていた。感染状況等からルールは随時変更された。

社会心理学では、人の目が気になるからとる行動（＝社会的規範に従った行動）が、次第に個人的規範（信念）に変わるプロセスがわかっている。日本では人がいない場所でもマスクをする人が多いが、ドイツでは皆がやっているからではなく、ルールに従った行動をとる。なぜルールに従って行動できるかは、ドイツではどのようにしてルールができていくのかと関連があるのではないかと思う。市民が参加し、皆で議論してルールを作っていこうとする文化的背景が影響しているのではないか。

（文責：事務局）

質疑応答

Q：誰がルールを決めるのか。特に市民が判断しにくいコロナのような医学的なことについてはどうしているのか。

A：ルールは専門家が作成しているが、メルケル首相をはじめとして、全体としてリスクコミュニケーションがうまくいったのではないかと。政治家と市民のコミュニケーションが普段からできていることと、ドイツでは伝えること、議論することのトレーニングが子供の頃からできているという点が、このような事態に直面して効果を発揮したように思う。

Q：市民参加について、日独で差があるのか。

A：ドイツでは政策決定プロセスで市民の意見を取り入れる仕組みや手法と、手続きが公正だと評価すれば結果を受け入れようという市民の考え方がある。

Q：社会規範に従って行動していると、それが次第に自分の信念になっていくということについて詳しく知りたい。

A：社会心理学的に言うと、人の目を気にして行う行動は自分の本心からではないが、それを続けることにより、それが自分にとって重要なことに変化し、周囲に関わらず自分の信念となり得る。自分の行動と考え方が矛盾している場合（例：世の中の流れに押されてマスクをしなくてよいと思うところでもマスクをする）には心の中で葛藤が生じるが、①行動を変えるか（敢えてマスクをしない）、②考え方を変えるか（マスクをすることが信念になる）、のどちらかにより葛藤（心理的矛盾）が解消される。

○社会的規範から個人の信念になるプロセスで、自身で考え科学的データに基づき判断する力が日本の教育では育っていないので、周囲に流されて信念になってしまうの

ではないか。ドイツの市民参加プロセス（考え、決断、合意して皆でプロセスを作っていく）が日独のコミュニケーション力の差であり、政治への信頼を醸成しているのではないかと。自分で判断して行動する点では、環境行動にも同じことが言える。

○最近、ナッジという言葉がよく使われるが、これは、皆が気付かないうちにある行動をとれるように環境をコントロールするといったこと。本当によいことであれば気付かないうちに行動がとれるようにするのはよいことかもしれないが、本当に良いことかどうかをどうやって決めるのか、という問題がある。むしろ、なぜそうするかを自覚して考えられるようになるべき。

Q：マスクをなぜするかは、トイレに行って手を洗うのと同じ感覚ではないか。他人に迷惑をかけないという考え方が日本人にはあって、周りに流されるということではないのでは。環境問題についても、人に迷惑をかけないという姿勢が元にあるのでは。メルケル氏についての日本のメディアの高評価も情緒的で偏った感があり、日本人が自らを卑下する姿勢が社会にも悪影響を及ぼしているのでは。

A：合理的に考えてマスクが不要なところでマスクをつけるのはなぜかを考えたい。リスクコミュニケーションは、リスクに関する情報の共有が目的の一つで、専門家と市民との間のコミュニケーションが円滑に行なわれる手続きが機能していることが重要。それができていれば、例えコロナ拡大を抑えられなかったとしても、感染者批判などにはならないのではないかと。日本の場合、情報共有が不十分だったのではないかとと思う。

○日独の違いについては、社会規範から信念へ変化するプロセスをよく考えてみるべきではないか。（文責：事務局）